追悼文

芳子先生へのたくさんの「感謝」

女子栄養大学　副学長　武　見　ゆかり

本学に入職して36年になります。この間，故 香川芳子学園長には，たくさんのご指導を賜り，本当に感謝の想いしかありません。

1．仕事の歩みを残してくれる多くの写真に「感謝」

多くの方と同様，私も芳子先生からたくさんの写真をいただきました。それらの写真は，その都度都度の先生の笑顔や温かいお言葉を思い出させてくれると同時に，仕事の歩みの記録でもあります。写真撮影のご趣味について，2013年 3 月号の『栄養と料理』巻頭言に次のように書かれています。「そのときどきの写真はその人の生きた記録です。その場で最もその人らしい表情をおさめます。ご本人も気づかないよい表情をとらえている，とたいそう喜ばれることもあります。」



写真 1　2011年，第65回日本栄養・食糧学会大会（お茶の水女子大）の座長の様子。左は，古畑公　和洋女子大教授（当時）。



写真 2　2011年，第65回日本栄養・食糧学会大会（お茶の水女子大）にて。中央は，野口律奈さん（香川靖雄副学長の大学院修了生）。

いただいた写真を見ると，なるほど，私はこの時こんな表情していたのだと思うものが多々あります。写真 1 と 2 は，2011年の第65回日本栄養・食糧学会大会の写真です。座長をしているときの必死な様子や，連名の発表を終えて発表者であった中央の野口律奈さん（香川靖雄先生の大学院修了生）と一緒にほっとしたことを思い出します。芳子先生からいただいた写真は，私の人生の記録そのものであり，自身が気づいていない意思や感情を残してくれる大事な宝物となっています。本当にありがとうございました。

2．大学院の「実践栄養学専門演習」の実現に「感謝」

芳子先生のリーダーシップのおかげで実現した大学院のプログラムとして，2009年に開始し10年間続けた「実践栄養学専門演習-特定保健指導論」があります。2008（平成20）年から，高齢者の医療の確保に関する法律が施行され，特定健康診査・特定保健指導の制度が開始しました。この制度の中で，特定健康診査でリスクの高かった者に対し，特定保健指導を実施する際の初回面接を担当できる職種として，医師，保健師と並んで管理栄養士が位置付きました。

学長でいらした芳子先生は，当時大学院の栄養学専攻主任をしていた私に，「こういう動きがあるのに，うちが何かしなくていいのかしら。考えてみてください。」とおっしゃったのです。管理栄養士養成では量的にも質的にも国内トップクラスの実績を誇る本学だからこそ，という意味を込めておっしゃったのを覚えています。そこで，大学院研究科長でいらした佐久間慶子先生と相談し，特定健診・特定保健指導の制度設立に向けて国の検討会で中心的役割を果たされた津下一代先生（当時 あいち健康の森健康科学センター長）を大学院の非常勤講師に迎え，講義と実践的な演習からなる 3 日間のプログラムをご担当いただき，公開講座として実施してきました。このプログラムは，厚生労働省「健診・保健指導の研修ガイドライン」実践者育成研修プログラムに準拠し必要な単位を修得できるものとして，国立保健医療科学院の研修データベースにも登録されました。学外から保健師などの専門職を受け入れて実施し，本学の大学院生にとっては，現場の専門職と共に学べる貴重な学修の機会となりました。

この講座で10年間お世話になった津下一代先生は，2020年９月から本学特任教授として生活習慣病予防及び重症化予防の研究面でご活躍下さり，2025（令和７）年度からは臨床医学分野の専任の教授として，学生の指導と研究に従事してくださいます。こうした津下先生とのご縁も，芳子先生がつないでくださったものといえましょう。改めて深く感謝申し上げます。

３．第57回日本栄養改善学会学術総会の名誉顧問に「感謝」

2010年，私は第57回の日本栄養改善学会（以下，栄養改善学会とする。）の学術総会長を引き受けることになりました。思えば，大学院に入学して以来，学会運営には何度となく縁がありました。最初は，大学院修士２年の時に，小池五郎先生が会頭をされた昭和62（1987）年の第41回日本栄養・食糧学会で，指導教員であった足立己幸先生が事務局長を務められた際，事務局員として学会運営に関わりました。研究どころではない数か月でしたが，社会人経験もあった私には事務的な仕事もかなり向いているし，その分野の全体像やさまざまな動向を知ることができて興味深いと認識したのを覚えています。その後，1998年に足立先生が第７回日本健康教育学会の会長をされたので，事務局長として全体の仕切りを担当させていただきました。

事務局や事務局長を担うのと全体の責任者である会頭を務めることは，責任の重大さが全く違うのだと思い知ったのが，2010年の栄養改善学会でした。当時，栄養改善学会の会員数は約7,000名，学術総会参加者も約3,000名という規模の大きいものでした。これを運営するための協賛金を集めなければならない，準備から当日の運営まで坂戸キャンパスで多くの教職員の協力を得なければならない，などなど，実務的にも大変で，精神的にもかなりしんどいことを痛感しました。そんな私を気持ちの面で強く支えてくださったのが香川芳子学長です。名誉顧問をお引き受けくださり，大事な局面で学内外の方に協力を呼び掛けてくださいました。実行委員長を引き受けてくださった上西一弘教授，学術委員長を引き受けてくださった石田裕美教授のお二人の力も，本当に有難かったです。

「実践と研究が織りなす“栄養学”の構築と発展をめざして－一人ひとりの望ましい食の実現から地域の環境づくりまで」をテーマに，本学の実践を重視する観点も取り入れたプログラムとし，貴重講演には，肥満予防研究で著名なシドニー大学（当時）のBoyd Swinburn教授を招聘しました。芳子学長先生が名誉顧問として運営組織の頂点にいてくださったからこそ，教職員皆さまのご協力を得て，盛会な学術総会となりました。芳子先生の存在無くして，とてもできなかったと，改めて心から感謝申し上げます。



写真３　2010年，第57回日本栄養改善学会学術総会（女子栄養大学，坂戸キャンパス）の懇親会状にて。左から，西田千鶴本学大学院客員教授（当時，世界保健機関栄養専門官），武見，Boyd Swinburn教授（当時，シドニー大学），香川芳子学長。

４．栄養実践グループの食事会へのご出席に「感謝」

芳子先生は栄養実践グループのメンバーでもいらしたので，年度初めの新入教員の歓迎会や年度末の退職者送別会などにご参加くださっていました。途中から，年度末の会は開催場所を駒込の松柏軒とし，退職者がいなくても，年に１回くらい，ゆっくり食事をする機会を持ちましょう，となり，学園長となられた芳子先生もお誘いしてご一緒していただきました。

最後は，新型コロナウィルスの蔓延が起こる前年，2019年だったと思います。夕方暗くなると足元が心配なので，グループメンバーが先生のご自宅まで送迎しました。若い実験実習助手の一人ひとりにまで笑顔で学内での様子を聞いてくださり，いろいろな思い出話もしてくださり，楽しいひと時を過ごしました。私たちにとっては，芳子先生との心温まる大事な思い出です。こうした思い出を残してくださったことにも，皆で本当に感謝しております。

先生が綾先生から引き継がれ，守り育て，そして明夫学長に引き継がれた「食は命なり」の精神をしっかり胸に刻み，本学の発展と社会のすべての人の健康と幸せのために頑張ってまいります。どうぞお見守りください。